

下野市立南河内第二中学校

平成29年度

校長室だより

第 13 号

H 3 0 . 1 . 2 2

発行者

上野 保久

明けましておめでとうございます。

本年もよろしく願いいたします。 (今さらながらで申し訳ありません。)

暦が変わって、平成30年、2018年になりました。冬休み中、生徒たちは事故や事件に巻き込まれることもなく、無事に過ごせたことに何より安心しました。新年早々、もう高校入試が行われました。3年生のなかには、お正月どころではなかった人もいたのではないかと思います。

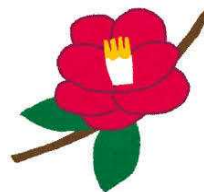


1月9日の休業明け集会で、校長講話として、次のように話しました。

平成29年度も残すところあと少し。4月の始業式に話した『4つのお願い』を中心に、ぜひとも、この9ヵ月間の『振り返り』を行ってほしい。

4つのお願いとは、

- 1 『セルフコントロール』ができる生徒になってほしい。
- 2 『授業を大切にする』生徒になってほしい。
- 3 物事を1年刻みで見て、『1年後にどのような中学生になっていきたいか』を考え、そうなるための努力をする』生徒になってほしい。
- 4 『愛校心』をもって生活してほしい。ということ。



3月には、いろいろなものに別れを告げて、4月には新しい生活が待っている。新しい生活とは、新しい環境・新しい人との出会いである。今から3月までは、そのための「助走」のようなものである。ととととと走って、ぽーんと飛ぶには、しっかりした「助走」が必要である。その事を意識して、『さっぱり』とした気持ちで最後を迎えてほしい。『さっぱり』の意味は、『心残りなく』という意味である。友だちとの人間関係の『心残り』、学習面での『心残り』、家族とのことでの『心残り』、自分の目標に対しての『心残り』などがないようにしてほしい。

すべてのことは、まだ、過去ではない。「3月までには」と、自分で締切日をつくって、修復・修正をしてほしい。そうして、『さっぱり』した気持ちで先に進んでほしい。

『心残り』を作らず、『有終の美』という「終わり方」の意識と、4月からの『心機一転』のための弾みをつける「助走」の意識をもって生活してほしい。

どうか、ご家庭でもご協力いただければと思います。

平成30年度 生徒会本部役員が決まりました。

12月14日に行われた生徒会本部役員選挙結果を基に、平成30年度の本部役員が決定しました。生徒会本部役員として、二中の生徒会活動を更に活性化させ、生徒全員が楽しく有意義な学校生活を送れるよう、頑張ってもらいたいと思います。教職員一同も全力でバックアップして参ります。ご家庭でも、ご協力よろしくお願ひします。

会 長	2年	K・Y	さん
副 会 長	2年	M・H	さん
副 会 長	1年	N・R	さん
書記・会計	2年	T・T	さん
〃	2年	T・Y	さん
〃	1年	O・Y	さん
〃	1年	K・H	さん
〃	1年	H・Y	さん



俳句作りに思う～芸術や文化に親しむ～

「日本というのは自然そのものが非常に繊細にできている。」と数学者である藤原正彦氏がその著書『国家の品格』の中で述べていました。藤原氏は知り合いの外国人数学者の弁をひいて「例えば楓の葉は非常に繊細で華奢である。欧米の楓の葉は、もっと大きくて厚ぼったい。そのせいか色の変化が大まかだ。それに比べ日本の楓の葉は、薄く繊細なうえ、一つの木にも赤い葉、オレンジの葉、緑の葉などがあり色彩が豊かだ。」とのこと。その文章を読んで、『へーそーなんだ』と改めて、木々を眺めたことを覚えています。



また、「日本人は、自然と心を通わせるという得意技を持っている。」とも述べています。その好例として『俳句』を上げているのです。俳句で季節を読むのです。

本校では、季節ごとに俳句作りを実施しています。全生徒、全職員が作ります。自分の周りの自然に目を向けたり、人との関わりを思い起こしたりしながら、それぞれが自分なりの一句を「ひねり出して」います。その目的のひとつは、「生徒の情緒的発達を期待して、芸術や文化に親しむ機会を設ける」ということです。各教室の廊下壁面に掲げられている生徒作の『俳句』は読んでいてとても楽しいです。その様子や状況を想像すると、何と美しい、何とユーモアがある、そして、何と素直な気持ちが込められているかと思われる作品ばかりです。すばらしい。こういうわずか17文字の詩に込められた情景や思いを共有できることがすばらしいと思っています。演劇鑑賞や音楽鑑賞を1年おきに行っていますが、俳句も含め、少しずつ情緒が育っていくのを感じます。

これはおすすめ私の一冊



『100歳までボケない101の方法～脳と心のアンチエイジング～』 白澤 卓二（しらさわ たくじ）著 文春新書 700円

著者は、順天堂大学大学院医学研究科・加齢制御医学講座教授で、専門は長寿制御遺伝子の分子遺伝学、アルツハイマー病の分子生物学、アスリートの遺伝子研究という難しそうな学問です。

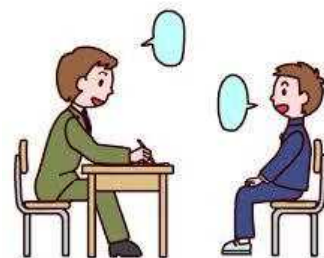
この本は、その見地から、『食事』についてのレッスン、『日常生活の習慣』についてのレッスン、『運動』についてのレッスンに分けて、いかに健康で長生きするかということの「101の方法」を具体的でわかりやすく、かつ根拠を示しながら説明しています。どの方法も、試してみたくなるようなことばかりです。

中でも、『食事編7』魚の王様はサケ』『食事編10』野菜の王様はブロッコリー、『習慣編67』旅は脳の活性化に欠かせない』などが面白かったです。せめて、毎日意識して生活すれば、あと何年かは寿命が延びるのではないかと思えました。

※ 前号(第12号)で紹介しました『失敗を生かせば人生はうまくいく』外山滋比古著の本は、昨年度にも一度紹介した本でした。うっかりしてしまいました。申し訳ありません。

校長室の窓から

- 昨年暮れから今年にかけて、高校入試に面接がある生徒に対して、「面接の練習」をしました。職員が分担を決めて行うのですが、私も例年通りその分担に加わりました。昨年2グループを担当して、今年は3グループを担当します。



校長室において、これまでに3グループの3年生の面接の練習をしました。どの生徒も、真剣に私の話を聞いてくれました。

これまで私は、何度か本当の面接官になって面接をしてきた経験があります。その時、どのようなことに注意したか、面接官側からの視点で話をしました。志望の理由は様々ですが、考えてきたことを一生懸命に話す姿をみていると、心から「頑張れ！」と激励せずにはいられません。相手が真剣であればあるほど、その責任の重さを感じます。

わずか1時間程度の時間ではありますが、とても深くふれあえた気がします。生徒の一生懸命にふれあえた気がします。お礼を言って校長室を出て行く生徒たちの後ろ姿に、改めて「頑張れ！」と『念』を込めました。